

1993年の本。

第七景 八転び九起きの転職、今は人気の自転車屋さん

職安通いをつづけたが、なかなか中高年には仕事がない。失業保険が切れかけるころ、とどのつまりは新聞の求人広告を見て、ミシンのセールスマンになった。

「女房は猛反対でしたね」

街頭にミシンをおいて縫ってみせる。売れば、「月百万円」も得られるが、売れなければ徒労におわる。この通称「街展」と呼ばれる街頭展示セールスをやるのけるには身も心もタフでなければならない。ましてや自宅付近の繁華街でそれをおこなうのであ臍に毛が生えてほしいとさえ思ったという。

「これでも一橋卒ですからね。照れくさいやら、情けないやら。毎日、登山帽やカウボーイハットを深めにかぶり、下をむいて縫っていました」

近所の子どもから「天野のオジサン!」と呼ばれ、頭に血がのぼった。元部下の夫婦つれが「部長!」と声をかけてきたときは、しばらく顔をあげられなかった。

...

おなじ会社の訪問販売のセールスマンから「乞食販売」と陰口を叩かれながらも、天野さんは成績トップを走りつづけた。しかし三年後、その仕事を辞めている。もはや「街展」は時代遅れになったらしく、会社が訪問販売に重点をおきはじめたのである。「街展が“乞食”なら、訪販は“押売り”ですよ。それこそ私はしたくない」

第九景 腕ききマッサージは経験豊富な話術が決め手

「しかし逃げてばかりいるから、あるお相撲さんは業を煮やして殴りかかってきたこともあるんですよ。でもね、寝ちゃうと、お客さんは“自分のオンナだ、”という態度をとりはじめる。そうなると、ほかのお客さんがつかなくなる。けっきょく自分で自分のくびを締めてしまうことになるのですね」

プロのホステスに徹しきった。新聞は硬派の全国紙からピンク記事を満載した夕刊紙まで精読して、話のネタを仕入れる。浅くではあるがゴルフも小唄も、三味線も琴も習って、いかなる話題に対応できるようにする。小学校卒の自称「無学」の女性にとって、銀座は「夜の大学」であった。

「ほんと、夜の蝶とは言いえて妙だと思いますよ」

両隣りにいるお客の腿のあたりにそっと掌をおく。むこう側にいるお客の眼をじっと見ながらしゃべる。そうすれば一度に少なくとも三人のお客の相手をできる。そのうちにべつのお客からご指名があり、またもやそのように振るまう。客席から客席へ、夜ごと舞う姿は蝶であった。

「うれしい悲鳴? とんでもない。いつのころからか、指名があるたびに嫌だなと思うようになったんですよ。どうしてか、おわかりになります?」

お客のツケを回収するのも担当ホステスの役目である。社用族が多く、その企業の経

理部門のOLに贈り物をするなどして、それとなく支払いをうながした。荷を背負ってはおろす、おろしては背負う。

「私にとって銀座の十数年間は、借金との闘いでもありましたね」

・・・

「センスある銀座の女になるのはたいへんなことなんです。きもの、帯、帯揚げ、帯締め、帯留め、草履をワンセットでそろえ、毎日替えなくちゃならない。出費もかさむし。そのうえお客のツケまでかぶる。いいスポンサーでもいれぱらくですがね」

・・・

子どもたちは育ち、一人はお役所に、一人は巨大企業に職を得た。四十七歳の「しのぶ」は銀座を去る。

不運はその後も、つづく。

荒木町（東京・新宿区）にささやかなバーをひらくが、胆嚢を患って倒れる。入院中、店は使用人に食いものにされ、廃業に追いこまれる。つづいて早稲田（同）でこれまた小規模のレストランを営むが、病気が再発し、維持できなくなった。

「残ったのは二千万円の借金だけ……」

・・・

「しのぶ」は「マッサージのおばさん」に変身する。

・・・

「昨夜は七人のお客さんからご指名があったんですよ。マンション住まいのご夫婦、商家のご主人、水商売の女将さんなど、お客さんはさまざまですね。夕刻七時からはじまって終了したのは朝四時半、ちょっと疲れますが、いまの私にはこれしか収入の道はありませんからね」

第三九景 全盲の輝仁事業家、トライアスロンに挑戦す

46歳の時に全盲（網膜色素変性症）

50歳でプラスチック加工の有限会社設立。→ハケロを求めて、食べる、飲む、カラオケを歌う、に走った。→食べ放題、飲み放題、運動不足→50代で重度の糖尿病。→「健康になりたい一心」→60歳から伴走でランニング→70kgが50kgに戻った。→ランニング大会へ出場。

第四〇景 妻の協力と登山で脳梗塞も医者なしで回復

六十七歳で脳梗塞。→2年間自分でリハビリ。奥さん「よく飽きずにやっていると良かったですよ。もう執念というしかありませんね」→動かなかった指がしだいに動くようになる。なんとかか歩ける。→リハビリで山歩きを奥さんと始めた。→一年後、手の痺れも消え、医師は「奇跡的な回復ですよ。もう大丈夫」と言ってくれた。

第五九景 ゲートルとリュックで鎌倉のガイド無料承り ライフワークとした日本史の勉強

メインテーマ「鎌倉の研究」

退職後の五年間、史書をひもとき、そこにある史跡七十七カ所をゆっくり、繰り返し見てまわる。こうしてたっぷりインプットすると、こんどはアウトプットしたくなる。

第六〇景 アマチュア無線、誰かと話したいの一念で

鋳物職人としての腕はまだまだおとろえていない。若いころから日本各地の工場をまわって鍋釜、仏像、機械・船舶の部品などなんでも手がけ、腕を磨きあげてきた。だからこそ六十五歳を過ぎてからも自動車部品の工場に雇われ、仕事をつづけることができた。

無料パスを支給された高齢者が、毎朝、ラッシュの人波に揉まれながら、地下鉄とバスを乗りついで工場へ通勤する。この生活が七十八歳までつづいたが、ご本人は「いっこうに苦にならなかった」という。

・・・

退屈しのぎにデパート、名刺、公園、繁華街をめぐり歩くが、一カ月もしないうちに苦痛になる。「毎日あてもなく出歩いておれんですよ」

都会の公団住宅に住み、職場へかよいつづけていたので、隣り近所とはあいさつ程度のおつきあいしかない。息子夫婦のもとに身をおけば、なおのこと地域の異邦人となる。「引っ越しもできん。行くところあらへん、することあらへん。自宅にいて、しかたなく、机の周りをぐるぐるまわっていたんですよ」

すでに述べたが、自炊はお手のものである。**定食屋よりもおいしい食事をこしらえるし、喫茶店より香りのいいコーヒーを掩れる**。外食をする気にもならず、したがって飲み食べながらしゃべる馴染みの店もない。

「問題は口なんです。食べるほうの口はいいとしても、しゃべるほうの口がなんともならん。これにはほとんど困りはてましたよ」

・・・

ふっと気がつくと一日なにもしゃべっていない。

「他人はどうかしらんが、私はしゃべらずにおるのがつらくてね。神経がいらだってきて、夜眠れんようになる。頭がボケーツとしてくる。**ものを言わんのがこんなにつらいとは、それまで思いもよらなかった**」

・・・

80にしてアマチュア無線の免許を取得。